

ン、ラキチャンカ、メッドヌイ、マグネットゴルスク、
ゴリキー、ホールと日本人旅行者も行ったこともない所
を巡り巡って、ハバロフスクの第十六収容所にたどり着
いた。ここにはたくさん日本人がいた。上官も同僚も
部下も知人もいた。ここでは裁判が待っていた。私は、
スパイ嫌疑で、二十二年の強制労働の刑を言い渡され
た。判決後、私は収容所隣接の病院で病理技手兼通訳と
して働いた。回診に付いていき、医師の指示を受けて処
置した。経験三十年を誇るグレービッチ少佐は、デキタ
リスと配合禁忌のストロハンチンを併用しようとしたこ
ともあり、私は、その処法を中止するのに苦勞した。ま
た時には蛭を高血圧患者に一匹ずつ付けてすぐ治ると信
じていた。一匹の蛭が二百グラムの血を吸うと言ってい
た。精々二、三グラムと反論した私は、数日後作業に出
された。

間もなく日本人の積年の不満が爆発し、大事件が勃発
した。

去勢された馬のように

栃木県 山田 市郎

ソ連国境通過と、密林の中の収容所暮らし、牡丹江の
冬は早い。もう十一月下旬に入っていた。来る日も来る
日も、いつ帰れるか見当のつかない毎日を送っていた。
目的のない毎日の連続は、ただうんざりするだけだっ
た。そのうち帰国のため準備せよ、というソ連側の通告
を受け、一時ににぎやかさを取り戻し、暗闇に光を見る
思いがした。牡丹江駅に向かって、五百人単位で出発し
ていった。帰還列車は有蓋貨車を二段にしたもので、一
車両五十人すし詰めの窮屈のギリギリのものであった。
機関士はウクライナ系ソ連人であった。ムシロに毛布を
敷いて防寒服装のままのゴロ寝である。

国境通過は鉄道警備のソ連兵が遮断機を開閉するだけ
の全くお粗末なもので、人家も見えず、索漠たるもので
あった。あたかも我々の前途を暗示するかのよう。

我々の行先は不明で、ソ連将校も兵士もダモイダモイを連発しているだけだった。彼等自身も行き先は知らされていないのかも知れない。方角からして奥地に行くことだけが予測された。候補生の中で、私の最も仲のいいグループの一員で、同じ分隊の中川八郎君がいた。彼はハルビン大学ロシア語科卒で、入隊前は満州国総理府課員であった。そして通訳をしていた。彼が聞き出したことによると、ニコライスクから出港するため奥に進むということであった。

ソ連領に入ると全くの密林地帯である。行けども行けども人跡未踏の地帯に、貧弱な鉄路が続いていた。貨車はいくつあそこの一時間、ここで二時間と、長い停車をして我々をいらさらせた。ゆっくり貨車で四、五日を経て、コムソモルスクに着いた。ここも開拓村で、めばしい建物も見当たらなかった。アムール河の岸辺の町と後でわかった。それからトラックに乗せられ、幾つかのラーゲルを通過して、目的の地らしいラーゲルに到着した。ホルモリー地区であった。木柵を張りめぐらせ、丸太積みみのラーゲルである。二二〇収容所と呼ん

だ。

周辺の大地も密林もすっかりカチカチであった。到着早々、水くみに行くことになった。ツルハシと麻袋が渡された。ラーゲルから千メートルほど行った所に、大地より五十センチくらい低い、長い氷の道に連れて行かれた。その長い道をツルハシで掘削する。それは小川の水塊である。それを解かして使用するのである。まさに生命の脈であった。水への苦労は到着一日目から始まった。

帰国するまで暫定的にここで待機するという名目であったが、事実はバム鉄道の建設に従事させるためのものであった。まず、鉄道を敷くため、帯状に密林を伐採し、鉄路の敷地を造成する。ついで開拓村をつくるため、予定敷地内を伐材伐根する。一方、伐材された材木で枕木、開拓村の家屋。家屋は丸木のまま下側にアールをとって積み重ね、屋根は板張り、必要な寝台、机などの家具もつくる。

共同施設、道路づくり、それに農園、養豚の仕事と、尽きることはない。ここではすべて原始的な海戦術で

ある。日本人は彼等から見ると、器用な人種に見えるらしい。特に自分のラーゲルは工兵隊が中心であつたせいかも知れない。

二一〇収容所は、かつて囚人が収容されていたらしい。長い間無住であつたせい、手を加えなければならなかつた。四面を鉄条網に取り巻かれた一方口で、東と南隅に監視用の望楼がつくられていた。舎屋は丸太積み、両側に二段の床張り、これがベッドである。ここに防寒服のままゴロ寝である。中央にドラム缶を横にしたストーブが置かれ、食堂、浴場は別棟となっていたが、いずれもお粗末なものであつた。

作業は日本人の自主性に任せられていたが、ノルマは大きく、その消化は並み大抵ではなかつた。食事は三食ともに大豆にコンブのスープ、ふすま入りの黒パン一片。私たちはこれをれんがと呼んだ。到底人間の口に入るべきものではなかつた。さすがに歩行困難者、栄養失調者が続出し、営門ならぬ出入り口で倒れるものが続出した。殺風景この上もなく、食気だけが二人前、与えられるものは半人前、いつも空き腹で、お腹の虫がどこ

でもいつでもグウグウ鳴り放しであつた。こんな状態でもよく生きて帰れたものと、何度も何度も思わざるを得なかつた。

帰国を餌に、その日を待ちわびながら、去勢された馬のように起きて、働かされて、わずかな食糧でも食つて寝る日課であつた。それでも歯をくいしばって耐え抜かなければならなかつた。これに耐えられないものは死があるだけ。戦友たちの多くがここで、栄養失調が主因で、風邪等が導火線となって死んでいった。

こんな朔北の地で、あたら人材が次々と死の世界に送られて行つた。痛恨この上もない日々であつた。医療などといったものは皆無に等しかつた。病室といえただ休むだけ。ここにはノルマがない、作業がない、それがせめてもの救いであつた。暗黒な世界とはこのことだとしみじみ思つた。